

国語

2025年2月10日（月）

一般入学試験

<注意事項>

1. 受験票は机の右上に受験番号が隠れないように置くこと。
2. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
3. 試験中は机の中に何も入れず、机の上には鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム以外の物は出さないこと。
4. 試験中に問題冊子の印刷不備等に気づいた場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 試験中に体調が悪くなった場合は、遠慮せずに早めに試験監督に知らせること。
6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置くこと。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。



文華女子高等学校

第一問 ①から⑳の空欄にあてはまるものを「

」の中から選び、記号で答えなさい。

① 後の展開のために を敷く。

「ア 副線 イ 伏線 ウ 複線 エ 福線 「

② 時間を する。

「ア 労費 イ 老費 ウ 浪費 エ 漏費 「

③ 科目の授業を受ける。

「ア 選択 イ 洗濯 ウ 宣託 エ 先卓 「

④ 鉄は い。

「ア 難 イ 硬 ウ 固 エ 堅 「

⑤ 悪事を る。

「ア 図 イ 計 ウ 量 エ 謀 「

⑥ 未倒。

「ア 全人 イ 前人 ウ 善人 エ 禅人 「

⑦ 勇猛 。

「ア 花冠 イ 可換 ウ 日間 エ 果敢 「

⑧ 「忌中」の読み方は である。

「ア きちゅう イ きなか ウ いみなか エ もなか 「

⑨ 「譲る」の読み方は である。

「ア あたえる イ はかる ウ ゆずる エ へりくだる 「

⑩ 「平穩」の類義語は である。

「ア 冷静 イ 沈着 ウ 無事 エ 穩便 「

⑪ 「吉報」の類義語は である。

「ア 訃報 イ 速報 ウ 日報 エ 朗報 「

⑫ 「分裂」の対義語は である。

「ア 統一 イ 分割 ウ 全体 エ 混合 「

⑬ 「架空」の対義語は である。

「ア 空想 イ 実在 ウ 存在 エ 空虚 「

⑭ 本性を隠しおとなくすることを「をかぶる」という。

「ア 犬 イ 皮 ウ 虎 エ 猫 ー

⑮ とてもかなわないことを「が立たない」という。

「ア 鼻 イ 齒 ウ 足 エ 手 ー

⑯ 「言う」の尊敬語は である。

「ア 申す イ 言います ウ おっしゃる エ 伺う ー

⑰ 「しかし」と同じ品詞の語は である。

「ア この イ また ウ とても エ 全然 ー

⑱ 五月の異名は である。

「ア 皐月 イ 弥生 ウ 葉月 エ 長月 ー

⑲ は現存する最古の和歌集といわれ素朴な古代の歌が数多く集められている。

「ア 源氏物語 イ 万葉集 ウ 金槐和歌集 エ 古今和歌集 ー

⑳ 「ある日の暮れ方のことである」の書き出しで始まる小説『羅生門』の作者は である。

「ア 夏目漱石 イ 森鷗外 ウ 芥川龍之介 エ 太宰治 ー

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

異質な他者とのつきあい

高校生ぐらいまでは、^(※1)フリーリング共有性の高い、同世代で自分と同質の小さな集団のなかで^(※2)自己完結し、そこで閉鎖的^(へいさしき)な仲間集団を作って生活していることが多いと思います。

しかし、学校を卒業してやがて社会に出れば、自分たちと同じ^(※3)属性を帯びる集団以外の、さまざまな世代や違う価値観をもった人たち、違う地方や、場合によっては外国からきた人たちなどと出会い、関係を作っていくかなくてはなりません。

気が合うか合わないかというフリーリングの共有というよりは、役割を分担しながら一緒に仕事をして（a）ギョウセキを上げることが第一に重要になる「社会的な関係」にはいると、フリーリングの合う人とだけ付き合うというわけにはいきません。だからそれまでに、①自分の中に異質なものを取り込めるようなある種の構えというものが、自分の中にどうしても必要になってくるのです。

となると、やはり単に「こいつは俺と同じだ」という同質性だけに頼って友だちをつなげていくような親密な関係の作り方だけをしている、いきなり社会に出たときにどうしても戸惑いが大きくなります。

異質なものをさまざまなに取り込む力がないと、つながりを保てなかったり、異質な他者との交流といううま味も、味わえなかったりします。

やはり、関係の作り方のポイントとして、異質性、あるいは他者性というようなものを少しずつ意識して、それを通してある種の親しさみたいなものを味わっていくトレーニングを少しずつ心がけていくことが大切です。最初からというのは無理かもしれないけれど、少しずつ慣れていくのです。

「傷つきやすい私」とのつきあい方

さらにいえば、フィーリング共有性を重視してつながった関係の友だちでも、やはりその中にもフィーリングの違いが出てくること
があると思います。でもそれはそれとして、また違った形でフィーリングのつながりをより深めていくきっかけとしてお互い認め合う
べきです。ちよつとでも違うと、「あ、この人違う」となって、関係を保つ努力を放棄ほうきしては、人と関係を作る力もつきません。
ある程度（b）辛抱強さがないと、どのみち人づきあいはうまくいかないものなのです。

人との関係を作っていきたい、つながりたいという積極的な思いが一方であり、でもやっぱり傷つくのはいやだといった（A）消極
的な恐れ感情もある、それが人間です。私の（c）インシヨウでは、若い世代であればあるほど、傷つきやすさというものを内面的に
持っている人が増えているのかなあ、という気がしています。「傷つきやすい私」が増えているように思うのです。

「人とつながりたい私」と、でも「傷つくのはいやだという私」という一見すると（d）ムジユンした自我のあり方と、自分自身で
どう折り合っていけばいいのでしょうか。やはり基本的には、②この人は自分にとって「信頼できる他者」だ、と思える人を見つける
ということが絶対必要になると思います。

I その場合、信頼できる「私と同じ人」を探すというよりは、信頼できる「他者」を見つけるという感覚が大事です。

どういうことかという、信頼はできるかもしれないけれど、他者なのだから、決して自分のことを丸ごとすべて受け入れてくれる
わけではないということを、しっかり理解しておこうということなのです。

「友だち幻想」

II、この点をもう一度確認しておきましょう。「自分のことを百パーセント丸ごと受け入れてくれる人がこの世の中のどこかに

いて、いつかきつと出会えるはずだ」という考えは、はっきり言って幻想です。

「自分というものをすべて受け入れてくれる友だち」というのは幻想なんだという、どこか醒めた意識は必要です。でもそれは他者に對して不信感を持つことと決してイコールではないということは、ここまで読んでくれた皆さんになら、きつと理解していただけるはずですね。

価値観が百パーセント共有できるのだとしたら、それはもはや他者ではありません。自分そのものか、自分の〈分身〉か何かです。思っていることや感じていることが百パーセントぴったり（e）一致していると思つて向き合っているのは、相手ではなく自分の作つた幻想にすぎないのかもしれない。

Ⅲ

相手の個別的な人格をまったく見ていないことになるのかもしれないのです。

きちんと向き合えていない以上、関係もある程度以上には深まっていかないし、「付き合っている、何かさびしい」と感じるのも無理もないことです。

（※⁴）

Ⅳ

過剰なⅣを持つのはやめて、人はどんなに親しくなっても他者なんだということを意識した上での信頼感のようなものを作つていかななくてはならないのです。

このことと少し関連するのですが、このところ、自分を表現していくことに対して、すごく恐れのある人が多くなっているのではないかと思うのです。

思春期というのは多かれ少なかれそういうものですが、それはなぜかというところ、「百パーセントわかってもらいたい」とか、あるいは「自分の本当のところをすべてきちんと伝えたいじゃないか」と思つてしまうことが原因なのではないかと思ひます。それもやはり、「百パーセントの自分を丸ごと理解してくれる人がきつといるはずだ」という幻想を、知らず知らずのうちに前提としているためです。むしろ「人というものはどうせ他者なのだから、百パーセント自分のことなんか理解してもらえっこない。それが当然なんだ」と思

えはずっと楽になるでしょう。だから、そこは絶望の終着点なのではなくて希望の出発点だというぐらい、発想の転換てんかんをしてしまえばいいのです。

恋愛こそ幻想を持ちやすいれんあい

「百パーセント自分を受け入れてくれる誰かがいるはずだ」という幻想は、恋愛関係においてとりわけ抱きがちになるかもしれません。でも結局そうじゃないんだということを、人は失恋で学んだりするわけです。そして少しずつ大人になっていくのです。

「自分をぜんぶ丸ごと受け入れてくれる」ということを、「絶対受容」という言葉で表現しますが、この絶対受容性を、人間はついつい求めがちなのです。

たとえば女の子なら、それは「王子様願望」のような形で現れますよね。自分をすべて受け入れてくれて、どんなわがままでもニコニコ聞ってくれる王子様。でも王子様なんていないわけです。「だったら私は恋愛から降りる」ではなくて、王子様なんていないんだというところから、人を好きになることを始めるのが大切なのです。

男の子だったらやっぱり優しい母親のような存在でしょうか。子どものころのお母さんはやさしく何でも受け入れてくれて、自分のことを第一に配慮はいりょしてくれる存在であることが多い。「自分がこうしたい」と思うことは、いつも先回りして準備してくれる。でも、そういうものを同世代の異性に求めても、「キモイ」の一言で片付けられてしまいそうだ。だから「二次元」の世界に逃げてしまう、ということなのでしょう。

(中略)

要は、親友にしても、恋人にしても、まるごとすべて受け入れてくれてるわけではないんだけど、自分のことをしっかり理解しようとしてくれている人と出会うーそういうレベルで、私たちは他者を求め、しっかり向き合って関係を深めていけることが、③現実世界で〈生のあじわい〉を深めていくためには必要なことなのです。

(菅野仁『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』より)

(※1) フィーリング ・ 感触。感じ。情操。現在では、芸術作品などから受ける気分や、人との交際などで感じられる微妙な雰囲気。意で多く用いられる。

(※2) 自己完結 ・ ・ ・ 何かの物事について、自分自身の中だけで納得したり決着したりしているさま。

(※3) 属性 ・ ・ ・ ・ ・ ある事物に属する性質・特徴。

(※4) 過剰 ・ ・ ・ ・ ・ 必要な程度や数量を越えて多いこと。ありあまること。また、そのさま。

問一 二重傍線部 (a) から (e) について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二 波線部 (A) の「消極的」の類義語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 能動的 イ 受動的 ウ 自発的 エ 静的

問三 空欄

I

Ⅲ

 に入る接続語として適切なものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ つまり ウ やはり エ さて オ かし

問四 傍線部①「自分の中に異質なものを取り込めるようなある種の構えというものが、自分の中にどうしても必要になってくる」とあるが、それはなぜか。理由に当たる部分を六十二字で探し、最初と最後の五文字を抜き出しなさい。(末尾の句読点は除く)

問五 傍線部②「この人は自分にとって『信頼できる他者』だ、と思える人を見つける」とは、どういうことか。次の中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信頼でき、自分のことを丸ごと受け入れてくれる「他者」を見つけるということ。

イ 信頼できる「私と同じ人」を探すということ。

ウ 他者に対して不信任を持ちながらも、他者とのつながりを求めているということ。

エ 信頼はできるが、他者なのだから、決して自分のことを丸ごと受け入れてくれるわけではないと理解するということ。

問六 空欄 IV に入る言葉として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妄想 イ 思想 ウ 信頼 エ 期待

問七 傍線部③「現実世界で〈生のあじわい〉を深めていくためには必要なこと」とあるが、どういうことか。簡潔に説明しなさい。

問八 本文の内容として不適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者との関係を作るために異質性、他者性を意識し、ある種の親しみやすさを味わっていくことが大切である。

イ 絶対受容は、女の子なら自分をすべて受け入れ、わがままを聞いてくれる王子様を求めるという例が挙げられる。

ウ 「自分というものをすべて受け入れてくれる友だち」は幻想であり、他者に不信任を持つことと同義である。

エ 自分を完全に理解してくれる人はいないと絶望するのではなく、人というものは他者なのだから理解してもらえないのは当然だと発想を転換してしまえばいいと筆者は述べている。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

リナはその日も、ランドセルを背負ったまま公園に寄って、池のほとりにたたずんだ。

九月に入ったばかりの夕方五時の空はまだ明るい。散歩やジョギングで行き交う人たちが途切れるのを待って、途中で拾ってスカートのポケットに入れておいた①小石を、池に投げ入れた。

緑色に濁った水に落ちた石は、すぐに見えなくなってしまう。池は明治時代に湧き水を使つてつくられた。真ん丸な形なので満月池と呼ばれている。広い池だ。昔は週末に貸しボートも営業していたらしい。でも、最近は水がすっかり汚れてしまい、水草や藻も繁殖しすぎて、何十匹もいるはずのニシキゴイの姿はめったに見られない。

そんな満月池に投げ込む小石は、昼間、学校で言われた嫌な言葉の身代わりだった。朝から放課後まで言われた言葉を数えて、その数の小石を池に放って、ウチに持ち帰らないようにする。

今日は三つ。どれも、いつもの言葉だった。

「ずるいよ」と言われた。体育の時間に②Iのミニゲームをやった。女子で一番背が高くてジャンプ力もあるリナは、次々にスパイクを決めて、守備でもブロックに何度も成功した。すると、②相手チームの子が悔しまぎれに、リナが体育の授業と一緒に受けるのはおかしい、ずるい、ひきょうだ、と言いだしたのだ。

リナは(A)ミックスルーツ——昔ならハーフ、もつと昔なら混血、さらに昔なら、あいのこと呼ばれていた。

(※1) 日系ブラジル人三世のお母さんと日本人のお父さんの間に生まれた。ブラジルは男女ともにバレーボールの強豪国なので、ブラジルの血を引いたリナがバレーボールが得意なのは当然だから、ずるい、ひきょう、不公平……。

ひどい理屈だった。でも、しょっちゅうだ。体育のダンスをほめられたときに「ブラジルはサンバの国なんだから、うまいのはあ

たりまえじゃん」と^(※2) ケチをつけられたのは、七月のことだ。夏休みを挟^{はさ}んでも、そういうところはちっとも変わらない。

味方のチームの子は口々に「気にすることないよ」「リナは全然日本人じゃん」「ウチらとおんなじだよ」と励ましてくれた。

でも、リナが小石と一緒に投げ込んだ二つめと三つめの言葉は、「日本人じゃん」と「おんなじだよ」だった。これもいつもの言葉だ。悪気がないのはわかる。でも、違う、そうじゃない……というのをうまく言えないから、小石を池に投げる。

ポケットを空にしたリナは、寄り道をしたぶんを取り返すように、足早に歩きます。

③今日は石の数が三つですんでよかった。転校してきたばかりの一学期の最初の頃は、毎日七つも八つも石を拾っていた。物珍しそうにじろろ見る視線も言葉の数に加えるなら、ポケットが破れてしまうぐらい、たくさん拾わなくてはいけなかった。

みんなも少しずつ慣れてきたのだろう。前の学校でも、その前の学校でもそうだった。でも、「慣れる」と「わかる」は違う。前の学校でも、その前の学校でも、わかってくれた子はほとんどいなかった。だから、お別れの寄せ書きには、同級生や先生からのこんな言葉が並んでいた。

『リナに出会って、私の中の差別や偏見^{へんけん}が消えました。リナはりっぱに日本人だよ!』

『ねばり強さはクラスの誰よりも日本人らしかったリナさん。新しい学校でも自信を持ってがんばってください』

リナの体に流れている「日本人」と「ブラジル人」の割合を計算すると、「日本人」のほうが多い。でも、彫りの深い顔立ちや、硬い髪質の^(a) 癖^{くせ}っ毛、背が高く脚長の体つきを見ると、ブラジル人ってDNAが強いのかなあ、と思う。

ただし、^(b) コクセキは日本で、生まれたのも日本で、ブラジルへはまだ一度も行ったことがない。日本語はまったく問題なく使えて、国語は得意科目だ。ポルトガル語も少しはだいじょうぶ。でも、それは家でお母さんと話すときに使うだけなので、^(B) バイリンガルにはほど遠い。それで「ブラジルだから」と言われても困ってしまうのだ。

この学校に転校したときは、最初の挨拶で、自分からミックスルーツだと説明した。前の学校とその前の学校ではクラス担任の先生に説明してもらったけど、もう六年生なのだから自分の言葉で話したかった。

今度のクラス担任の先生は、リナの考えに反対はしなかった。でも「いいぞ、どんどんやりなさい」という様子でもなかった。「そうか……わかった」と深刻な顔でうなずき、始業式の朝になっても「べつに無理して言わなくてもいいんだからね」と念を押していた。「無理して」の言葉を聞いたとき、この先生に説明をお願いしなくて大正解、と思った。

説明を聞いた同級生には「やっぱり」という顔になった子が多かったし、「名前は漢字なのには？」と初歩的なことを訊いてくる子もいた。ブラジル人と日系ブラジル人の区別もあまりついていない。日系人や外国人が身近にたくさんいる地域ではないのだ。

中には「えー、でもけっこう日本人っぽいから、気にしないでいいんじゃない？」と言った子もいる。ほめてくれていたのか、慰めたり(c)励ましたりしたかったのだろうか。

何日かたって学校に少しずつ馴染^{なじ}んできた頃、別の子に言われた。

「リナが日系人だって、わたしなんか言われなきゃわかんなかったし、名前も日本語なんだから、黙ってればよかったのに」

その日は、IIの球ほどのサイズの石を満月池に放り込みたかった。

十三歳で両親とともに日本に来て、二十歳でリナを産んだお母さんは、ときどきブラジルの海の話をしてくれる。目がチカチカするほど真っ白な砂のビーチや、地平線に沈む大きな夕陽を、リナに見せたいらしい。リナも一度は行ってみたいなど思っている。

III、ふるさとに帰るのではなく、観光地として。

どちらにしても、ブラジルへの二人分の旅費は、まだしばらくの間は貯まりそうにないのだけど。

公園を出たリナは、さらに早足になって家路^{いえじ}をたどる。早く帰ろう。急いで帰ろう。お母さんが晩ごはんをつくって待っている。リナはお母さんと二人暮らしだった。お母さんと同じ年のお父さんは、リナにものごころがつく前にいなくなった。離婚をして、養育費を払うという約束もあっさり破って、いまはどこに住んでいるかも知らない。

お母さんは帰宅したリナと入れ替わるように仕事に出かける。お母さんが派遣で(d)ツトめているのはコンビニの惣菜工場^{そうさいくわう}で、

時給が良くて人手が足りない夜間のシフトに入って朝まで働く。シフトに空きができたときには、IV 延ばしてお昼過ぎまで働くこともある。

(e) ケイヤク期間は半年。そろそろ更新の時期だった。

(重松清『かぞえきれない星の、その次の星』所収「コスモス」より)

(※1) 日系ブラジル人・・・両親の一方もしくは両方が、日本人にルーツを持つブラジル人。

(※2) ケチをつける・・・何か欠点を見つけて非難する。

問一 二重傍線部 (a) から (e) について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

問二 波線部 (A) (B) の語句の意味として最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(A) ミックスルーツ

- ア 異なった種類の両方の性質をもち、どちらともつかない中間のもの。
- イ 日本と外国に一族の血のつながりを持つ人。
- ウ 複数の国や文化に遺伝子的なふるさを持つ人。
- エ 血筋が複雑であり祖先の家系が分からない人。

(B) バイリンガル

- ア 二か国語を自由に使いこなせる人。
- イ 母国語のように外国語を話す人。
- ウ 外国に長期間住んでいる人。
- エ 長年住んでいた外国から帰国した人。

問三 空欄 Ⅰ・Ⅱ に入るスポーツの名称として最も適切な組み合わせはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|------------|---|-------|
| ア | 一 卓球 | 二 | ゴルフ |
| イ | 一 バドミントン | 二 | テニス |
| ウ | 一 バスケットボール | 二 | 野球 |
| エ | 一 バレーボール | 二 | ボウリング |

問四 空欄 Ⅲ・Ⅳ に入る言葉として最も適切な組み合わせはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|-----|
| ア | 目 ただし | 二 | さらに |
| イ | 目 しかし | 二 | むしろ |
| ウ | 目 一方 | 二 | また |
| エ | 目 もしくは | 二 | だから |

問五 傍線部①「小石を、池に投げ入れた」とあるが、リナが小石を池に投げ入れる理由を最も適切に表したものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 家に帰りたくないことから下校途中に公園へ立ち寄り、池のほとりにたたずんでいて手持ちぶさただったため。
- イ 明治時代につくられた歴史ある池に小石を投げ込むことで、学校で嫌な言葉を言われて傷ついた気持ちを発散させるため。
- ウ 下校途中の暇ひまつぶしに拾ってポケットに入れていた小石を投げ込むことで、家に持ち帰らないようにするため。
- エ 学校で言われた嫌な言葉の身代わりとして小石を投げ込むことで、悔しさや悲しみを家に持ち帰らないようにするため。

問六 傍線部②について、「相手チームの子」はなぜ「リナが体育の授業と一緒に受けるのはおかしい、ずるい、ひきょうだ」と言ったのか。理由に当たる部分を本文中から五十四字で探し、最初と最後の五文字を抜き出しなさい。（末尾の句読点は除く）

問七 傍線部③について、今日は三つだったのに対して、転校してきたばかりの頃は毎日七つも八つも石を拾っていた理由を、本文中の語句を用いて四十字以上四十五字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容として不適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア リナは、他のみんなと区別されることなく生活したいという思いをわかしてもらえないことに、うんざりしている。

イ リナは、「ブラジルだから」と言われるのと同じように、「日本人っぽい」と言われることも嫌っている。

ウ リナは、周囲の理解が得られる日系人や外国人が身近にたくさんいる地域に引っ越したいと考えている。

エ リナは、母親から話に聞くブラジルの海には、ふるさとに帰るのではなく、あくまで観光として訪れたいと思っている。

